

## 介護支援専門員によるインフォーマル・サポートのアセスメントに関する文献的研究 —インフォーマル・サポートのアセスメント自己評価尺度の検討—

橋本 力

大阪市立大学大学院生活科学研究科

### Study of Literature for Assessment Concerning Informal Supports by Care Managers : Examination for Self-Evaluation Scale to Evaluate Assessment Concerning Informal Supports by Care Managers

Chikara HASHIMOTO

*Graduate School of Human Life Science, Osaka City University*

#### Summary

The purpose of the current study is to propose a self-evaluation scale to evaluate assessment concerning informal supports by care managers who work in the public long-term care insurance program in Japan. In this study, the author examined several types of assessment tools to clarify the domain of assessment concerning informal supports.

The domain of assessment concerning informal supports is composed of grasp for instrumental supports, emotional supports, relationships between frail elderly and supporter, and evaluation of informal supports, and so forth. Also, assessment concerning family members need to grasp needs of caregiver, health status of caregiver, care burden, and so forth. A self-evaluation scale to evaluate assessment concerning informal supports by care managers need to be composed of these domains.

**Keywords** : 介護支援専門員, インフォーマル・サポート, アセスメント, 自己評価

*Care manager, Informal supports, Assessment, self evaluation*

#### I. はじめに

要援護者の自立生活支援を目的とした<sup>1)</sup>介護保険制度では、その要として、介護支援専門員を位置づけている<sup>2)</sup>。介護支援専門員によって行われる援助実践は、ケアマネジメントに基づいている。

ケアマネジメントでは、要援護者の多様なニーズを充足するために、フォーマル・サービスに加え、家族、親戚、友人・同僚、近隣、ボランティアなどのインフォーマル・サポートも社会資源として位置づけている<sup>3)</sup>。

インフォーマル・サポートの特徴として、フォーマル・サービスが公平で標準的なものであるのに対し、インフォーマル・サポートは柔軟でミニマムを超えた支援が可能であるとされている<sup>4)</sup>。

このようなインフォーマル・サポートをケアプランに組み込むことにより、要援護者の不安感の軽減や心理面での安心感などがもたらされたことが事例により報告されている<sup>5)</sup>。

介護支援専門員は、フォーマル・サービスに加え、インフォーマル・サポートに関しても、要援護者の支援において有効な社会資源として認識し、その理解をアセスメントによって深めていくことが必要である。

ケアマネジメントでは、このようなインフォーマル・サポートに関するアセスメントの必要性が指摘されている<sup>6)~8)</sup>。Moxleyは、インフォーマル・サポートのアセスメントを行う際において、「社会的ネットワーク」および「社会的支援」といった視点から明確にする枠組み

を提示している<sup>9)</sup>。

また、現在開発されている多くのアセスメント票においても、インフォーマル・サポートの情報を把握するための項目が設定されている<sup>10)~16)</sup>。

しかし、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの必要性が指摘されながらも、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントを評価した実証的研究は、現在多くは行われていない状況にある。

介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントを実証的に捉え、検討を重ねることは、ケアマネジメントに基づいた援助を行っている介護支援専門員の質を高めるにあたって重要な課題である。その際、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントの現状を評価するための尺度が必要となる。

そこで本稿では、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度を開発する際の探索的段階として、文献および既存のアセスメント票を整理することにより、その枠組みについて提案することを目的とする。

その際、まず、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの必要性について整理を行うこととする。次に、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点を検討するために、文献および既存のアセスメント票において設定されているインフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点について整理を行うこととする。また、介護支援専門員自身による自己評価からインフォーマル・サポートに関するアセスメントを評価することの意義について検討を行うこととする。以上を踏まえた上で、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて提案することを本稿の目的とする。

## Ⅱ. ケアマネジメントにおけるインフォーマル・サポートに関するアセスメントの必要性

ケアマネジメントにおいて、インフォーマル・サポートのアセスメントは、アセスメント過程における一要素として位置づけることができる。

Barbaraは、「友人、家族、配偶者、その他の人々とクライアントとの関係について包括的な理解を深めることは、アセスメントでの主要な要素の一部である」としている<sup>6)</sup>。

また、白澤は、アセスメントを「要援護者を社会生活上の全体的な観点からとらえ、現時点での諸種の問題点やニーズを評価・査定することである」と定義し、アセ

スメントにおいて明確にすべき点として、「要援護者のニーズの内容やその程度」、「ニーズに対応する要援護者の能力」、「ニーズに対応するインフォーマルな支援の力量」、「ニーズに対応するフォーマルなサービスの力量」の4点を挙げている<sup>7)</sup>。

さらに、野中は、アセスメントを行う順として、利用者本人のニーズアセスメント、セルフケア能力の把握、インフォーマルケアの把握、地域における専門機関や専門家の情報把握の順にアセスメントを行うことが重要であるとしている<sup>8)</sup>。

多くの論者によるケアマネジメントの定義では、要援護者のニーズに適した社会資源を結びつけるための調整の機能がケアマネジメントの共通点として挙げられている<sup>17)~22)</sup>(表1)。その際、ケアマネジメントにおいて調整する社会資源は、要援護者の多様なニーズに対応するものであり、様々な社会資源が必要となる。

白澤は、要援護者のニーズを充足する社会資源として、フォーマルセクターおよびインフォーマルセクターを挙げ、それぞれの社会資源が有している長所を生かしてニーズを満たすことがケアマネジメントの特徴であるとしている<sup>23)</sup>。

また、Moxleyは、ケアマネジメントの定義を「多様なニーズをもった人々が、自分の機能を最大限に発揮して健康に過ごすことを目的として、フォーマルおよびインフォーマルな支援と活動のネットワークを組織し、調整し、維持することを計画する人（もしくはチーム）の活動」としている<sup>19)</sup>。

つまり、ケアマネジメントにおいて、インフォーマル・サポートは、フォーマル・サービスと同様、要援護者のニーズを充足する際に必要な社会資源として位置づいている。このことから、要援護者のニーズに対応するインフォーマルなサポート提供者の力量をアセスメントによって明確にしていくことは、インフォーマル・サポートを社会資源として捉えるケアマネジメントにおいて必要不可欠なプロセスであるといえる。

また、要援護者のニーズの理解といった視点からも、要援護者の生活を取り巻くインフォーマル・サポートのアセスメントが必要になる。

ソーシャル・ワークでは、人と環境との相互作用に焦点を当て、援助を行うことが指摘されてきた。

PincusとMinahanは、ソーシャル・ワークの焦点を人々と資源システムとの相互作用にあるとしている<sup>24)</sup>。また、GermainとGittermanは、生態学の視点から生活モデルに基づくソーシャル・ワークを提唱し、人と環境との相互作用に焦点を当て援助を行っていくとした<sup>25)</sup>。このよ

表1. ケアマネジメントの定義

Peter Johnson et al <sup>17)</sup>	ケースマネジメント・アプローチの基本原則は、1人のワーカーであるケースマネージャーが、クライアントと複雑なサービス供給システム (delivery system) を結び付け、クライアントが適切なサービスを利用できるように確保する責任をもつこと <sup>56)</sup> 。
Robert Parker <sup>18)</sup>	クライアントのために、すべての援助活動を調整する (coordinate) 手続き <sup>56)</sup> 。
D.P.Moxley <sup>19)</sup>	多様なニーズをもった人々が、自分の機能を最大限に発揮して健康に過ごすことを目的として、フォーマルおよびインフォーマルな支援と活動のネットワークを組織し、調整し、維持することを計画する人 (もしくはチーム) の活動。
Renshaw <sup>20)</sup>	ケースマネジメント・システムは、個々のクライアントのニーズを充足するためのサービス供給を、単一の機関あるいは一人のワーカーの責任とするシステムである。サービスそのものは別々の機関から提供されるかもしれないが、ケースマネージャーがサービスを組み合わせ、ニーズ充足を確保するのである <sup>57)</sup> 。
Barbara <sup>21)</sup>	ケースマネジメントには、クライアントに対して地域社会で個別的な助言、カウンセリング、セラピーを提供しながら、同時に地域のサービス提供機関やインフォーマル支援のネットワークのなかで、クライアントと必要とされるサービスや支援を連結させるという2つの中心的機能がある。
Dinerman <sup>22)</sup>	利用者とその家族のために、多様な提供者による多岐にわたる必要なサービスを、調整し整理するように意図された1つの機能である <sup>58)</sup> 。

うに人と環境との相互作用に焦点を当てるソーシャル・ワークでは、要援護者のニーズを明確にする際においても、人と環境との関連性に焦点を当て、アセスメントを行うことが必要になる。

人と環境との相互作用に焦点を当てるソーシャル・ワークと要援護者のニーズに対応する社会資源を調整するケアマネジメントについて、白澤は、「ソーシャルワークの中核的な機能はケアマネジメントである」としている<sup>26)</sup>。このような関係性にあるソーシャル・ワークとケアマネジメントは、ニーズの捉え方においても共通した視点を持っている。ケアマネジメントにおいて、要援護者のニーズを捉える際は、要援護者の身体機能的側面および精神心理的側面に加え、社会環境的側面を総合的に理解し、その関連性の中で要援護者のニーズを捉えていくとされている<sup>27)</sup>。このことから、人と環境との関連性のなかで要援護者のニーズを理解する際は、要援護者の社会環境的側面にも焦点を当てる必要がある。その社会環境的側面の一要素として、要援護者の生活を取り巻くインフォーマル・サポートも含まれる。

つまり、人と環境との関連性のなかで要援護者のニーズを理解していく際は、要援護者の身体機能的側面およ

び精神心理的側面の理解に加え、社会環境的側面から、要援護者の生活を取り巻くインフォーマル・サポートをアセスメントにより明確にしていくことが必要となる。

### Ⅲ. インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点

#### 1. インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点

Moxleyは、要援護者の社会的ネットワーク、および社会的支援に対し、ケアマネージャーが敏感であるべき理由について、「第1にネットワークに仲介された社会的支援が、人々の健康や社会的機能に良い影響を与えることを示す重要な一群の研究がある」こと、「第2に、利用者がネットワークを通じて情緒的物質的支援を得ることを助けると、フォーマルな対人サービスを通じて供給される援助が補われ強まる可能性がある」こと、「第3に、社会的ネットワークを用いることを利用者に勧めることで、利用者がコミュニティの中でより高い統合レベルに達することを助ける可能性がある」ことの3点を挙げている<sup>28)</sup>。

このように、要援護者の社会的ネットワークおよび社会的支援は要援護者の生活での様々な側面において効果的な影響を及ぼすことが考えられる。現在、わが国においても高齢者のソーシャル・サポートを扱った研究が数多く存在する<sup>29)~33)</sup>。高齢者のソーシャル・サポートを捉えた研究では、それぞれの研究において数多くの定義がなされ、様々な視点から高齢者のソーシャル・サポートを明確にするための枠組みが検討されている。しかし、ソーシャル・サポートを測る際の提供主体として、多くの先行研究においてインフォーマル・サポートが含まれている。また、ソーシャル・サポートの機能は、様々な分類がなされているが、その共通点として、「情緒または感情と、手段または実体的な援助を区別する」<sup>33)</sup>ことがあげられ、多くの先行研究において、手段的サポートおよび情緒的サポートといった視点からの測定が行われている。

ケアマネジメントにおいても、アセスメントによって、要援護者のインフォーマル・サポートを明確にすることは必要不可欠なプロセスであり、その際、どのような視点からのアセスメントが必要になるかの整理が求められる。

Moxleyは、相互ケアのアセスメントにおいて、インフォーマル・サポートを中心としたサポート提供者の力量を明確にする際に、社会的ネットワークおよび社会的支援といった視点から、それらの情報を捉えていく必要性を指摘している<sup>9)</sup>。その際、Moxleyは、要援護者の社会的ネットワークおよび社会的支援を、「社会的ネットワークの構造」、「社会的ネットワークとの相互関係の特徴」、「社会的ネットワークによる社会的支援の特徴」の3つの領域から明確にすることを提案している<sup>34)</sup>。

高齢者のソーシャル・ネットワークおよびソーシャル・サポートに関する研究では、その多くが研究対象を要介護度が高い要援護高齢者ではなく、一般高齢者を対象に行われている傾向にある。その理由として、要介護度が高い要援護高齢者や寝たきりの状態にある要援護高齢者は、ソーシャル・ネットワークなどが限定される傾向にあることや要援護高齢者本人からの回答を得る事が困難である点などが挙げられる。

しかし、ケアマネジメントにおける援助対象者は、多様なニーズを有した要援護者であり、介護保険制度においても介護支援専門員が援助を行う対象は、要支援から要介護状態にある様々な要援護者である。

介護支援専門員は、要介護度が高く、コミュニケーションが困難な要援護者に関しても、要援護者本人からだけでなく、様々な情報源から要援護者に関する情報を

収集することが必要である。ケアマネジメントにおいても、アセスメントの際の情報源として、要援護者本人との面接に加え、他の対人サービス専門職との面接、公的なサービス記録の閲覧と分析などによる多くの情報源から要援護者に関する情報を収集する必要性が指摘されている<sup>35)</sup>。

また、現在わが国で開発されている多くのアセスメント票では、様々な要介護状態にある要援護者に対応できるよう、身体状況や精神心理状況および社会環境状況などを総合的に把握できるよう構成されており、インフォーマル・サポートに関する情報把握の項目においても、様々な視点からインフォーマル・サポートを明確にするための項目が設定されている。

本稿では、様々な要介護状態にある要援護者を援助対象としている介護支援専門員が、普段の支援において、より一般的に必要とされる視点を含んだインフォーマル・サポートのアセスメント自己評価尺度の枠組みとなるよう検討を行うこととする。

そこで、現在、開発されている既存のアセスメント票において設定されているインフォーマル・サポートに関する情報把握の項目を整理することにより、その枠組みについて検討を行うこととする。

## 2. アセスメント票におけるインフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点

現在、わが国で開発されている多くのアセスメント票において、インフォーマル・サポートに関する情報を把握するための項目が設定されている。

本稿では、「日本訪問看護振興財団方式」<sup>10)</sup>、「竹内方式」<sup>11)</sup>、「居宅サービス計画ガイドライン」<sup>12)</sup>、「日本介護福祉士会方式」<sup>13)</sup>、「MDS-HC2.0」<sup>14)</sup>、「日本社会福祉士会方式」<sup>15)</sup>、「ケースマネジメント研究委員会方式」<sup>16)</sup>といったアセスメント票において設定されているインフォーマル・サポートに関するアセスメントの項目について整理を行った(表2)。

その結果、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点として、大きく2つの視点に整理することができた。

まず、第1の視点として、要援護者とインフォーマル・サポートとの関係性の明確化を目的としたアセスメントの視点が整理された。このような視点を持つ項目として、友人や近所との関係、近隣やボランティアとの関係、親しく付き合っている人などを明確にするための項目がアセスメント票において設定されていた。

次に、第2の視点として、インフォーマル・サポート

表2. わが国のアセスメント票におけるインフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点

アセスメント票	インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点	
日本訪問看護振興財団方式	<b>家族</b> ■介護状況 ■介護の負担感 ■介護者の知識・技術 ■家族全体の家事能力 ■介護継続の意思 ■要援護者と家族との関係など。	<b>その他のインフォーマル・サポート</b> ■友人、近所との関係など。
竹内方式	■家族関係 ■介護者の気持ち ■介護者のストレス ■他の家族のストレス ■介護者の負担感など。	■近所付き合い ■親しく付き合っている人 ■趣味の集まりなど。
居宅サービス計画ガイドライン	■家族構成 ■家族による援助の現状 ■家族の介護状況・問題点 ■家族の健康状態など。	■支援提供者 ■活用している支援内容 ■受けたい支援など。
日本介護福祉士会方式	■要援護者と家族の関係 ■主な介護者の態度 ■別居家族との関係 ■家族の各々がとらえている問題など。	■近隣やボランティアとの関係 ■人の出入り ■友人との関係 ■近隣との関係など。
MDS-HC2.0 (Minimum Data Set-Home Care)	■介護者の状況 ■家族が介護に関わる頻度 ■家族が介護に費やすおおよその時間 ■主介護者の健康状態など。	■インフォーマルな介護者の名前 ■利用者との関係 ■援助をしている内容（助言や精神的な支援、IADL援助、ADL援助）など。
日本社会福祉士会方式	■家族の意見、要望 ■家族・親族の介護の有無 ■家族の健康状態 ■家族の介護負担 ■家族による介護内容など。	■親しい近隣・知人の有無 ■近隣・知人による援助の有無 ■近隣・知人による援助の希望など。
ケースマネジメント研究委員会方式	■家族構成 ■家族関係 ■家族の介護状況・問題点など。	■ボランティア、近隣援助、友人援助、親戚援助の利用状況 ■親戚、近隣、友人・同僚、ボランティア、地域の団体や組織の支援内容および受けたい支援など。

による要援護者への支援内容の明確化を目的としたアセスメントの視点が整理された。このような視点を持つ項目として、活用している支援内容、援助をしている分野（助言や精神的な支援、IADL援助、ADL援助）、親戚、近隣、友人・同僚、ボランティア、地域の団体や組織による支援内容などを明確にするための項目がアセスメント票において設定されていた。

さらに、インフォーマル・サポートに関するアセスメ

ントの視点として、インフォーマル・サポートから受けたい支援、近隣・知人による援助の希望など、要援護者が希望するインフォーマルな支援を明確にするための項目も設定されていた。

また、現在開発されているアセスメントツールには、要援護者の生活を取り巻くインフォーマル・サポートを含んだ社会的支援について詳細に把握することに焦点を当てたアセスメントツールが存在する。本稿では、イン

フォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みを、より総合的な視点から検討するために、様々な視点から開発されたアセスメントツールを整理し、参考にとすることとする。本稿では、量的研究を元に妥当性が検討されたツールや個人のネットワークを視覚化することにより明確にするツールなど、様々な視点から開発された「Norbeck Social Support Questionnaire」<sup>36)</sup>、「Lubben Social Network Scale」<sup>37)38)</sup>、「Perceived Support Network Inventory」<sup>39)</sup>、「Eco Map」<sup>40)</sup>、「Social Network Map」<sup>41)</sup>といった5点のアセスメントツールにおける視点について整理を行うこととする(表3)。

「Norbeck Social Support Questionnaire」<sup>36)</sup>では、ネットワーク構成員の名前、ネットワーク構成員との関係、ネットワーク構成員との接触頻度、ネットワーク構成員との関係の長さ、ネットワーク構成員に対する愛情、尊敬、信用の程度、ネットワーク構成員から受けることができる援助の程度(緊急時の助けが必要な時、数週間起き上がれない時の援助など)などを明確にするための項目が設定されている。

また、「Lubben Social Network Scale」<sup>37)38)</sup>では、家族との交流頻度、プライベートな話の相手や援助をしてくれる家族の数、友人との交流頻度、プライベートな話の相手や援助をしてくれる友人の数などを明確にするための項目が設定されている。

「Perceived Support Network Inventory」<sup>39)</sup>は、本人に

より知覚されたソーシャル・サポートを明確にするツールである。設定されている項目は、ネットワーク構成員の名前、ネットワーク構成員との関係、情緒的サポート、アドバイスや情報、援助、サポート提供者からの支援に対する満足度、援助を頼める程度、互酬性などを明確にするための項目が設定されている。

「Eco Map」<sup>40)</sup>は、用紙に家族や友人、近隣などのネットワーク構成員、および社会資源などを記入し、それぞれの関係性などについて線によって視覚的に表現するツールである。ネットワーク構成員、およびネットワーク構成員との関係の質、関係の方向性などを明確にすることができる。

「Social Network Map」<sup>41)</sup>では、家族、友人、近隣の人々などのネットワーク構成員を円のマップに記入した上で、それらのネットワーク構成員による具体的なサポート、情緒的なサポート、情報、アドバイス、援助の方向、親密さ、交流の頻度、関係の長さなどを明確にするための項目が設定されている。

これらのアセスメントツール、および先に示したわが国のアセスメント票において設定されていたインフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点は、Moxleyが提示した社会的ネットワークおよび社会的支援といった枠組みからの把握と共通する視点を有していることが考えられる。

Moxleyは、「社会的ネットワーク」を明確にする際は、

表3. 社会的支援に関するアセスメントツールにおけるアセスメントの視点

<p><b>Norbeck Social Support Questionnaire</b></p>	<p>■ネットワーク構成員の名前、■ネットワーク構成員との関係、■ネットワーク構成員との接触頻度、■ネットワーク構成員との関係の長さ、■ネットワーク構成員に対する愛情、尊敬、信用の程度、■ネットワーク構成員から受けることができる援助の程度(緊急時の助けが必要な時、数週間起き上がれない時の援助など)など。</p>
<p><b>Lubben Social Network Scale</b></p>	<p>■家族との交流頻度、■プライベートな話の相手や援助をしてくれる家族の数、■友人との交流頻度、■プライベートな話の相手や援助をしてくれる友人の数など。</p>
<p><b>Perceived Support Network Inventory</b></p>	<p>■ネットワーク構成員の名前、■ネットワーク構成員との関係、■情緒的サポート、■アドバイスや情報、■援助、■サポート提供者からの支援に対する満足度、■援助を頼める程度、■互酬性、など。</p>
<p><b>Eco Map</b></p>	<p>■ネットワーク構成員の名前 ■関係性の質(強い、希薄、ストレスがある) ■関係の方向性など。</p>
<p><b>Social Network Map</b></p>	<p>■家族、近隣、友人などのネットワーク構成員の名前、■具体的なサポート、■情緒的なサポート、■情報、アドバイス、■援助の方向、■親密さ、■交流の頻度、■関係の長さなど。</p>

「社会的ネットワークの構造」および「社会的ネットワークとの相互関係の特徴」から情報を把握するとしている。その際、「社会的ネットワークとの相互関係の特徴」に関しては、相互関係の頻度、方向性、ネットワーク構成員への感情、関係の長さを示す持続性などから、その特徴を捉えていくとしている<sup>34)</sup>。

上記のアセスメントツールにおいても、ネットワークの構成員、ネットワーク構成員との接触頻度、関係の方向性、ネットワーク構成員に対する感情、関係の長さなどを把握するための項目が設定されていた。また、先に示したわが国におけるアセスメント票においても、要援護者とインフォーマル・サポートとの関係性の明確化を目的としたアセスメントの項目が含まれていた。これらの視点は、要援護者の社会的ネットワークを明確にする際において共通する視点である。

また、Moxleyは、「社会的支援の特徴」を捉えるにあたって、生活手段的な支援、物質的な支援、社会情緒的な支援を明確にするとした<sup>34)</sup>。

上記のアセスメントツールにおいてもネットワーク構成員からの具体的なサポート、情緒的なサポート、情報、アドバイスなど様々な支援内容を把握するための項目が設定されていた。また、わが国におけるアセスメント票においても、インフォーマル・サポートによる要援護者への支援内容の明確化を目的とした項目が含まれていた。

以上のことから、インフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいては、社会的ネットワークおよび社会的支援といった視点から、その情報を把握していくことが特徴として挙げられる。その際、社会的ネットワークの明確化においては、相互関係の頻度、関係の方向性、ネットワーク構成員への感情、関係の長さなどから、その特徴を明確にすることが必要となる。また、社会的支援の明確化においては、生活手段的な支援、物質的な支援、社会情緒的な支援などを明確にすることが求められる。

### 3. 家族に関するアセスメントの視点

また、インフォーマル・サポートの中でも家族のアセスメントに関しては、要援護者に対する支援内容や要援護者との関係性の把握などに加え、家族介護者自身の状況をアセスメントにおいて理解する必要がある。

家族は階層的補完モデルにおいて最も高齢者が期待するサポートであるとされている<sup>42)</sup>。このことを示すように介護保険制度以降においても、同居の場合に関しては、家族が要援護者にとって主要な介護者となっていること

が指摘されている<sup>43)</sup>。

介護支援専門員はこのような家族に対して、要援護者にとっての重要な社会資源としてだけでなく、要援護者と同様、援助対象者として捉える必要があるとされている<sup>44)</sup>。介護支援専門員は、援助対象者としての家族に対し、自己実現の支援や介護負担の軽減、および健康管理への支援をおこなっていくことが求められる<sup>44)</sup>。その際、家族が抱えている介護負担感や家族の健康状態をアセスメントにおいて明確にした上で、家族に関する支援を行っていくことが必要である。

先に示したわが国のアセスメント票<sup>10)~16)</sup>においても、家族に関しては、家族介護者の介護負担感や健康状態、家族の介護における問題点、介護者のストレス、および介護者の気持ちなど、介護者自身の状況を把握するための項目が設定されている。

## IV. 介護支援専門員によるインフォーマル・サポートのアセスメント自己評価に関する実証的研究の提案

本稿の目的は、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点を整理したうえで、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて検討を行うことであった。そこで、以下では、介護支援専門員自身による自己評価からインフォーマル・サポートに関するアセスメントを評価する意義について検討した上で、インフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて提案を行うこととする。

### 1. 専門職者による支援過程に関する自己評価の必要性

社会福祉法では、社会福祉事業の経営者が、自らその提供する福祉サービスの質の評価を行うことに努めるよう明記されている<sup>45)</sup>。また、介護保険法においても、居宅介護支援事業者は、自らその提供する居宅介護支援の質の評価を行うことに努めるよう明記されている<sup>46)</sup>。

このように、サービス提供者がサービスの提供過程に関して自己評価をおこなう必要性として「専門職者は自らが行ったサービスに対して評価を行う責任が存在すること」や「自己評価によって自ら提供したサービスの質に対して意識するようになり、自己改善を行うようになること」などが理由としてあげられる<sup>47)</sup>。

また、ケアマネジメントに関する先行研究においても、専門職者自身による自己評価の視点から検討が行われた研究が存在する<sup>48)~51)</sup>。さらに、介護支援専門員の

ケアマネジメント業務の現状を捉えた先行研究<sup>52)</sup>では、介護支援専門員の社会資源の把握に関する現状において、家族・親族関係、友人・知人・近隣、ボランティア・NPOのサポート源を設定し、これらのサポート源について把握できているかを、介護支援専門員の自己評価から捉えている。しかし、これらのインフォーマル・サポートに関する把握の現状は、それぞれのサポート源に対し、把握できているかどうかを一項目のみで尋ねている。

先に示したように、インフォーマル・サポートに関するアセスメントは、「社会的ネットワーク」および「社会的支援」などの視点から、より総合的に情報を把握していくことが必要である。つまり、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントの自己評価を捉える際においても、要援護者の社会的ネットワークおよび社会的支援の特徴など、より総合的な視点から捉えられたアセスメントの自己評価尺度を用いることが求められる。

## 2. インフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みの提案

介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて検討する際、その操作的定義および自己評価を測定するにあたっての下位概念についての検討が必要である。

本稿では、インフォーマル・サポートがケアマネジメントにおいて社会資源として位置づけること、また、アセスメントにおいて、インフォーマル・サポートを明確にすることは、アセスメント過程において必要不可欠なプロセスであることを整理した。その際、要援護者のニーズに対応するインフォーマルな支援の力量を明確にする際において、および人と環境との関連性から要援護者のニーズを理解する際に、要援護者の社会環境的側面からインフォーマル・サポートをアセスメントにより明確にする必要性を指摘した。

また、インフォーマル・サポートのアセスメントにおいて必要となる視点を、文献および既存のアセスメント票をもとに整理を行った。その結果、インフォーマル・サポートに関するアセスメントに共通する視点として、Moxleyが提示した「社会的ネットワーク」および「社会的支援」といった視点から情報を捉えていくことが整理された。

本稿では、介護支援専門員によるインフォーマル・サポートに関するアセスメントの操作的定義を「インフォーマルな支援の力量を明確にすることを目的に介護支援専門員によって行なわれるインフォーマル・サポー

トに関する情報把握、活用可能性の検討および評価の過程」とする。また、本稿では、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントの自己評価を測定する際の下位概念としてインフォーマル・サポートのアセスメントにおいて必要される「社会的ネットワーク」および「社会的支援」といった視点から自己評価尺度を検討していくことを提案する。その際、「社会的ネットワーク」においては、相互関係の頻度、関係および支援の方向性、ネットワーク構成員への感情、関係の長さなどの視点を、また、「社会的支援」においては、生活手段的な支援、物質的な支援、社会情緒的な支援などの視点を自己評価尺度においても取り入れることが必要である。これらの視点をもとに、インフォーマル・サポートと要援護者との関係性およびインフォーマル・サポートによる要援護者への支援内容などに関して把握できているかどうかを尋ねた質問項目を作成していくことが有効であると考えられる。

また、本稿では、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの自己評価尺度において、「インフォーマル・サポートの利用可能性の検討」、および「インフォーマル・サポートの評価」といった視点を取り入れることを提案する。HepworthとLarsenは、アセスメントの過程において情報を集め、分析し、統合する際、問題を改善するために利用可能な資源についても明確にすることをあげている<sup>53)</sup>。また、人と環境との関連性の中で要援護者のニーズを捉える際は、要援護者の社会環境的側面の一要素であるインフォーマル・サポートが、要援護者の生活においてどのような効果をもたらしているかをアセスメントにおいて評価することが必要である。Mooreは、家族やその人にとって最も近い社会集団およびフォーマルなケアシステムによって、個人がどの程度適切に支援されているか評価することをケースマネジメントの機能の一つとしてあげている<sup>54)55)</sup>。このような、「インフォーマル・サポートの利用可能性の検討」、および「インフォーマル・サポートの評価」の視点は、インフォーマルな支援の力量を明確にすることを目的としたインフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいても必要な視点であることが考えられる。自己評価の項目を検討する際においては、「インフォーマル・サポートの利用可能性の検討」、および「インフォーマル・サポートの評価」を行っているかどうかを尋ねた質問項目を設定することが必要である。

また、インフォーマル・サポートの中でも、家族に関しては、要援護者にとって重要なインフォーマル・サポートであると同時に援助対象者としての側面の理解が必

要である。そこで、家族に関するアセスメント自己評価においては、わが国における既存のアセスメント票においても設定されていた家族介護者の介護負担感や健康状態、家族の介護における問題点、介護者のストレス、および介護者の気持ちなど、介護者自身の状況などの視点について把握できているかどうかを尋ねた質問項目を作成し、自己評価の項目として設定することが望まれる。

以上に示した視点をもとに、総合的な視点から介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメントの自己評価を捉え、検討を重ねていくことが求められる。

## V. おわりに

本稿では、インフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいて必要とされる視点について整理を行い、その視点に基づき、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて提案を行った。その際、本稿では、既存のアセスメント票を整理することにより、インフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいて必要とされる視点を整理した。その結果、既存のアセスメント票におけるインフォーマル・サポートの情報把握の視点は、Moxleyがインフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいて必要であると指摘した「社会的ネットワーク」および「社会的支援」といった視点と共通することが整理された。本稿では、これらの視点を参考に、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの自己評価尺度を検討していくことを提案した。また、家族のアセスメントに関しては、援助対象者としての側面の理解が必要であり、家族介護者の介護負担感や健康状態、家族の介護における問題点、介護者のストレス、および介護者の気持ちなど、介護者自身の状況の把握についても自己評価尺度の項目に設定することを提案した。本稿では、インフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度を検討するにあたって、探索的段階として位置づけ、文献および既存のアセスメント票を整理することにより、その枠組みについて提案を行った。今後の課題として、本稿で提案した自己評価尺度の枠組みについて、さらなる精査を行い、より妥当性の高いインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みとなるよう検討を重ねていくことが求められる。

## 引用文献

- 1) 介護保険法規研究会：『新しい介護保険法』，中央法規出版，東京，33-34（2005）
- 2) 介護保険法規研究会：前掲書1），138
- 3) 白澤政和：『ケアマネジメントハンドブック』，医学書院，東京，23-25（1998）
- 4) 白澤政和：ケアプランの作成について，老年精神医学雑誌，14（9），1083（2003）
- 5) 『2003年度 地域における保健・医療・福祉サービスの総合的提供とインフォーマルセクターを組み込んだプランニング研究と地域モデル形成事業報告書』，生協総合研究所，東京，97-113（2004）
- 6) 白澤政和監訳，所道彦，清水由香編訳：『相談援助職のためのケースマネジメント入門—The Practice of Generalist Case Management—』，中央法規出版，東京，64-66（2005）
- 7) 白澤政和：『ケースマネージメントの理論と実際』，中央法規出版，東京，62（1992）
- 8) 野中猛：『図説ケアマネジメント』，中央法規出版，東京，30-31（1997）
- 9) 野中猛，加瀬裕子監訳：『ケースマネジメント入門 THE PRACTICE OF CASE MANAGEMENT』，中央法規出版，東京，40-49（1994）
- 10) 日本訪問看護振興財団編：『日本版 在宅ケアにおけるアセスメントとケアプラン—成人・高齢者用—』，日本看護協会出版会，東京，付録（1996）
- 11) 竹内孝仁：『ケアマネジャー アセスメントとケアパッケージその組みかた』，医歯薬出版，東京，付録（1997）
- 12) 在宅版ケアプラン作成方法検討委員会編：『居宅サービス計画ガイドライン—在宅高齢者の介護サービス計画の作り方—』，全国社会福祉協議会，東京，142-152（1998）
- 13) 日本介護福祉士会編：『生活7領域から考える 自立支援アセスメント・ケアプラン作成マニュアル在宅版』，中央法規出版，東京，付録（1997）
- 14) John N.Morris，池上直己，Brant E.Friesほか：『日本版MDS-HC2.0 在宅ケアアセスメントマニュアル』，医学書院，東京，付録（1999）
- 15) 日本社会福祉士会：『ケアマネジメント実践記録様式・介護保険対応版使用マニュアル』，ミネルヴァ書房，京都，148-160（2000）
- 16) 白澤政和：『ケアマネジャー養成テキストブック』，中央法規出版，東京，98-107（1996）
- 17) Peter Johnson，Allen Rubin：Case Management in Mental Health：A Social Work Domain？，*Social Work*，28(1)，49（1983）

- 18) Robert Parker: *Social Work Dictionary*, *National Association of Social Workers*, 20 (1987)
- 19) 野中猛, 加瀬裕子監訳: 前掲書 9), 12
- 20) Renshaw, J. : *Care in the Community : Individual Care Planning and Case Management*, *British Journal of Social Work*, 18, 79-105 (1988)
- 21) 白澤政和監訳, 所道彦, 清水由香編訳: 前掲書 6), 3
- 22) Dinerman, M.: *Managing the Maze: Case Management and Service Delivery*. *Administration in Social Work*, 16, 1-9 (1992)
- 23) 白澤政和: 前掲書 7), 14-15
- 24) Pincus, A. & Minahan, A. : *Social Work Practice : Model and Method*, *F. E. Peacock Publishing*, 9(1973)
- 25) Germain, C. B. and Gitterman, A. : *The Life Model of Social Work Practice*, *Columbia University Press*, (1980)
- 26) 白澤政和: ケアマネジメントの論点ー生活支援としてのケアマネジメントの方法ー, ケアマネジメント学, 1, 26-27 (2002)
- 27) 白澤政和: 前掲書 4), 1081-1089
- 28) 野中猛・加瀬裕子監訳: 前掲書 9), 42
- 29) 金恵京, 杉澤秀博, 岡林秀樹, 深谷太郎, 柴田博: 高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断研究, *日本公衆衛生雑誌*, 46(7), 532-541 (1999)
- 30) 金恵京, 甲斐一郎, 久田満, 李誠國: 農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感, *老年社会科学*, 22 (3), 395-404 (2000)
- 31) 権汝珠, 岡田進一, 白澤政和: 大都市高齢者の手段的ソーシャルサポートに対する選好度: 選好度の構造および選好度と基本属性との関連, *日本在宅ケア学会誌*, 6(3), 29-35 (2003)
- 32) 野口裕二: 高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポートー友人・近隣・親戚関係の世帯類型別分析ー, *老年社会科学*, 13, 89-105 (1991)
- 33) 野口裕二: 高齢者のソーシャルサポート: その概念と測定, *社会老年学*, 34, 37-48 (1991)
- 34) 野中猛・加瀬裕子監訳: 前掲書 9), 43-44
- 35) 野中猛・加瀬裕子監訳: 前掲書 9), 24-26
- 36) Norbeck, J. S., Lindsey, A. M., Carrieri, V. L. : The development of an instrument to measure social support, *Nursing Research*, 30(5), 264-269 (1981)
- 37) Lubben, J. E. : Assessing social networks among elderly populations, *Family & Community Health*, 11(3), 42-52 (1988)
- 38) Kane, R. A. : Assessment of social functioning : Recommendations for comprehensive geriatric assessment. In : Rubenstein LZ, Wieland D, Bernabei R, eds. *Geriatric Assessment Technology : The State of the Art*. New York : Springer Publishing Co, 91-110 (1995)
- 39) Orit, E. J., Paul, S. C., & Behrman, J. A. : The perceived support network inventory. *American Journal of Community Psychology*, 13(5), 565-582 (1985)
- 40) Hartman, A. : Diagrammatic assessment of family relationships, *Families in society -The journal of contemporary human services*, 76(2), 111-122 (1995)
- 41) Tracy, E. M., & Whittaker, J.K. : The Social Network Map : Assessing Social Support in Clinical Practice, *Families in Society*, 71(8), 461-470 (1990)
- 42) Cantor, M. H. : Neighbors and friends ; An overlooked resource in the informal support system. *Research on Aging*, 1, 434-463 (1979)
- 43) 服部万里子: 家族介護の変化と課題ー介護保険制度の関連からー, *社会福祉研究*, 88, 67-68 (2003)
- 44) 厚生省高齢者ケアサービス体制整備検討委員会: 『介護支援専門員標準テキスト第1巻』, 長寿社会開発センター, 東京, 144-145 (1998)
- 45) 大阪ボランティア協会: 『福祉小六法2007』, 中央法規出版, 東京, 26 (2006)
- 46) 介護保険法規研究会: 前掲書 1), 140
- 47) 岡田進一: 第三者評価の重要性ー評価とは, 情報開示とはー, *介護支援専門員*, 7 (4), 14-15 (2005)
- 48) 岡本玲子: ケアマネジメント過程の質を評価する尺度の開発ーデルファイ調査と信頼性・妥当性の検討, *日本公衛誌*, 46 (6), 435-446 (1999)
- 49) 安梅勅江, 片山秀史, 原田亮子, 島田千穂, 河西敏幸, 呉裁喜, 片山優子, 高山忠雄: ケアマネジメント専門性評価モデル試案の妥当性と信頼性および社会福祉士の自己評価の特徴, *老年社会科学*, 20 (1), 50-60 (1998)
- 50) 畑智恵美, 岡田進一, 小澤温, 白澤政和: 在宅介護支援センター職員のケアマネジメント実践ーケアマネジメントプロセスに基づいた援助行動の内容ー, *老年社会科学*, 22(1), 59-71 (2000)
- 51) 綾部貴子, 岡田進一, 白澤政和, 岡田直人: ケアマネジメント業務における介護支援専門員の課題実施度に関する研究, *厚生の指標*, 50(2), 9-16 (2003)

- 52) 馬場純子：介護支援専門員のケアマネジメント業務の現状と課題—「介護支援専門員のケアマネジメント業務に関する調査」より—, 田園調布学園大学人間福祉研究, 5, 63-86 (2003)
- 53) 横山稔, 北島英治, 久保美紀, 湯浅典人, 石河久美子訳：『人—環境のソーシャルワーク実践 対人援助の社会生態学』, 川島書店, 東京, 95 (2000)
- 54) 野中猛監訳, 羽根潤子訳：『ケースマネジメントの技術』, 金剛出版, 東京, 30-31 (2006)
- 55) Moore, S. : A Social Work Practice Model of Case Management : The Case Management Grid, *Social Work*, 35(5), 446 (1990)
- 56) 『新版・社会福祉学習双書』編集委員会：『新版・社会福祉学習双書2006 第17巻 ケアマネジメント論』, 全国社会福祉協議会, 東京, 21 (2006)
- 57) 杉本敏夫訳, ジョアン・オーム, ブライアン・グラストンベリー編著：『ケアマネジメント』, 中央法規出版, 東京, 16 (1995)
- 58) 野中猛監訳, 羽根潤子訳：前掲書 54), 20

---

## 介護支援専門員によるインフォーマル・サポートのアセスメントに関する文献的研究 —インフォーマル・サポートのアセスメント自己評価尺度の検討—

橋本 力

**要旨：**本稿では、インフォーマル・サポートに関するアセスメントにおいて必要とされる視点について整理を行うこと、およびその視点をもとに、介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度の枠組みについて検討を行うことを目的とした。その際、本稿では、インフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点を検討するために、文献および既存のアセスメント票において設定されているインフォーマル・サポートに関するアセスメントの視点について整理を行った。その結果、インフォーマル・サポートのアセスメントは、要援護者への支援内容の把握、要援護者との関係性の把握、およびインフォーマル・サポートの評価などの視点が必要となることが整理された。また、家族のアセスメントに関しては、家族の支援対象者としての側面の理解が必要であり、家族の主訴の把握、健康状況の把握、介護負担の把握といった視点が必要となることが整理された。介護支援専門員のインフォーマル・サポートに関するアセスメント自己評価尺度を作成する際は、これらの視点を含んだ尺度となるよう検討を行うことが望まれる。